



ぶぎん海外駐在員通信②

タイのEV市場について

武蔵野銀行 市場国際部海外進出支援室（千葉銀行バンコク駐在員事務所 出向）
福原 亮平

武蔵野銀行は国際業務を推進する目的で、シンガポール、バンコク、香港に行員を駐在・派遣しています。

本連載は現地行員によるリレーエッセイとして毎回、現地の生活事情やトピックスをお伝えします。

はじめに

脱炭素社会を目指すなかで、ガソリン車から電気自動車（EV）へシフトする動きが世界中で広がっています。タイ政府は、2030年までにタイ国内の自動車生産に占めるEVの割合を30%まで引き上げる政策目標を掲げています。

タイでは、1960年代の日系自動車メーカー進出を契機に、自動車産業が発展してきました。現在でも日系自動車メーカーの存在感が大きく、販売数全体の約85%のシェアを占めています。一方で、EV普及のために、タイ政府は補助金、輸入関税・物品

税の引き下げといった、EV振興策を打ち出しました。こうした中、中国系自動車メーカーを中心に、タイでの補助金制度等を活用し、新たなEVモデルを相次いで投入しており、タイ市場で圧倒的なシェアを誇る日系自動車メーカーに対して、中国系自動車メーカーが挑む形が鮮明になりつつあります。

本稿では、タイのEV振興策及びタイのEV市場における、日系・中国系自動車メーカーの動向に焦点を当てて紹介してまいります。

タイのEV振興策

タイ政府は、EV普及のために乗用車・ピックアップトラック・二輪車を対象とした、EV振興策を2022年2月に導入しました。恩典の内容としては、補助金の支給、輸入関税や物品税の引き下げになります（図表1）。乗用車を具体例にすると、希望小売価格が200万バーツ（約800万円、1バーツ≒4円）以下の乗用車で、バッテリー容量が10kWh～30kWh未満の場合は1台当たり7万バーツ（約

図表1 電気自動車（BEV）振興策の概要（乗用車抜粋）

		乗用車（低価格）	乗用車（高価格）
対象車両		・小売価格200万バーツ以下 ・現地生産（予定）車	・小売価格200万バーツ超700万バーツ未満 ・現地生産（予定）車
恩典	補助金	10kWhから30kWh未満：7万バーツ 30kWh以上：15万バーツ	なし
	輸入関税 (2022～2023)	最大40%引き下げ (現行日本車20%、韓国車40%、欧州車80%)	最大20%引き下げ (現行日本車20%、韓国車40%、欧州車80%)
	物品税 (2022～2025)	2%へ引き下げ（現行8%）	2%へ引き下げ（現行8%）
条件		<ul style="list-style-type: none"> ・2024～2025年までに現地生産 ・2024年に現地生産を開始：2022～2023年の輸入完成車台数と同数 ・2025年に現地生産を開始：2022～2023年の輸入完成車台数の1.5倍 ・3つのケースにおけるE-Partsの国産化条件 ①バッテリーのセル生産 ②バッテリーのモジュール組立+その他1部品* ③バッテリーパック組立+その他2部品* <p>*2025年までに5つの電子部品のうち1～2部品の国産化を義務付け</p>	

（各種公開情報より作成）



28万円)、30kWh以上の場合は1台あたり15万パーツ(約60万円)の補助金が交付されます。また、輸入関税は最大40%の引き下げ、物品税は現行の8%から2%へ引き下げとなります。希望小売価格が200万パーツ超700万パーツ(約2,800万円)以下の乗用車の場合、補助金は対象外となり、輸入関税は最大20%の引き下げ、物品税は200万パーツ以下の車両と同様に2%へ引き下げとなります。この振興策は、2022年から2025年まで実施予定で、輸入関税の引き下げのみ対象期間が2022年から2023年になります。

本振興策の恩典を受けた場合、自動車メーカーは2024年12月末までにタイ国内でEVを生産する必要があり、恩典を受けたEV完成車の輸入台数と同数分の国内生産が条件となります。国内生産開始時期を2025年12月末まで延長する必要がある場合は、輸入台数の1.5倍の台数を生産する必要があります。加えて、恩典取得者はタイ国産のバッテリーまたは部品を使用してEVを製造する条件が付され、規定に則した車両を生産できず、条件が達成できない場合は、補助金の返還や1台あたり2倍に相当する物品税額の支払いが命ぜられます。

タイ政府が完成車や部品の輸入を縮小させ、EVの国内生産を促す背景としては、自動車生産の30%をEVにする目標を達成すると同時に、東南アジアにおけるEV生産のハブを目指しているからです。現在、EV生産拠点として熾烈な主導権争いを行っているのが、インドネシアになります。両国はEV関連の投資誘致に本腰を入れており、インドネシアはバッテリー製造に用いるニッケル産出国という強みを、タイは強靱なサプライチェーンという強みを前面に押し出し、投資の呼び込みを図っています。

タイでは、EV振興策に加えて、タイ投資委員会(BOI)によるEV関連投資企業に対して、手厚い投資恩典制度を用意しています。また、2023年2月には、タイ国家電気自動車政策委員会(NEVPC)にて、EV用バッテリー(バッテリーセル)の国内生産促進に向けたインセンティブパッケージが承認されました。パッケージの内容としては、EV用バッテリーに対する物品税の引き下げ(8%から1%)と、

図表2 2022年タイの新車販売占有率

メーカー/ブランド	2022年	
	1月～12月販売台数	シェア
トヨタ*	288,809	34.0%
いすゞ	212,491	25.0%
ホンダ	82,842	9.8%
三菱	50,385	5.9%
フォード	43,628	5.1%
マツダ	31,638	3.7%
MG	27,293	3.2%
日産	22,521	2.7%
スズキ	20,083	2.4%
日野	14,339	1.7%
その他	55,359	6.5%
合計	849,388	100.0%

*レクサスを含む

(出典: MarkLines Automotive Industry Portal)

バッテリー国内生産に対する総額240億パーツ(約960億円)の補助金給付の2つになります。

タイ国内でのEV生産が本格化することで、サプライチェーンの構造も変化することが予想されます。日系自動車メーカーに部品を供給するサプライヤーは、自動車メーカーのタイ進出に伴い事業展開していることから、今後のサプライチェーン構造変化による、各サプライヤーの動向を注視する必要があります。

日系・中国系自動車メーカーの動向

前述のEV振興策を活用し、タイの自動車市場に攻勢をかけてきているのが、中国系自動車メーカーになります。2022年のタイ国内の新車販売台数は84万9,388台で、そのうち日系自動車メーカーのシェアは約85%と依然として大きな存在感を示しています(図表2)。

しかしながら、タイのEV市場に目を向けると、2022年は補助金制度等の活用により、手ごろな価格で販売している中国メーカーのプレゼンスが高まっています。2022年のタイのEV販売ランキングでは、上位に中国メーカーがランクインし、中国勢の台頭が目立っており、長城汽車(GWM)、上海汽車(MG)、比亞迪(BYD)の3社を合わせるだけで、全体の7割以上のシェアを占めています。それ以外は欧州メーカーが占めており、EV市場におけ

図表3 タイのEV販売ランキング（2022年1月～12月）

順位	車種	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
1	ORA Good Cat(GWM)	34	143	326	157	242	453	212	516	591	447	455	252	3,828
2	MG EP	120	57	67	22	33	145	182	383	256	522	383	223	2,393
3	MG ZS EV	16	10	13	11	14	7	21	67	10	101	205	330	805
4	Volvo XC40 Pure Electric	8	28	115	134	100	82	39	35	33	21	16	29	640
5	BYD Atto3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	60	252	312
6	Porsche Taycan	22	26	26	20	19	32	12	28	37	15	35	17	289
7	BMW ix3	14	9	28	17	13	16	10	37	37	32	39	13	265
8	Tesla Model Y	4	13	7	16	22	37	15	20	27	27	17	23	228
9	MINI Electric Cooper SE	11	13	18	16	23	27	21	40	12	13	20	9	223
10	Tesla Model 3	12	27	17	19	10	24	16	16	12	15	11	7	186
11	Nissan Leaf	7	5	3	2	12	8	11	12	22	21	14	13	130

(Autolifethailand.tv より一部抜粋)

る日系メーカーの存在感の薄さが否めません（図表3）。2023年に入っても中国メーカーの勢いは衰えず、7割以上のシェアを維持しています。

中国メーカーがここまで躍進している理由の一つとしては、EV振興策により若者でも手が届く手ごころな価格設定にあると思われます。各社の主要モデルの多くは、100万バーツ（約400万円）を切る販売価格となっており、タイ人ユーザーの購入の決め手の一つとなっています。特に、2022年の販売首位であったGWMの「Ora Good Cat」は、補助金



写真1：タイ国際モーターエキスポに展示されていたGWM「Ora Good Cat」



写真2：タイ国際モーターエキスポに展示されていた「Honda SUV e:prototype」

や物品税の引き下げにより、82万8,500バーツ（約331万円）という低価格で販売しており、人気を博しています。2022年12月に開催された「タイ国際モーターエキスポ」や2023年3月に開催された「バンコク国際モーターショー」では、同モデルに多くの来場者が集まっていた（写真1）。また、最近では街中でも同モデルを見かける機会が増えてきています。

EV市場で後れを取っている日系自動車メーカーですが、徐々に攻勢をかけ始めています。日産自動車は他社に先行して、2018年に「リーフ」をタイ市場に投入しました。同社が東南アジアでEVを販売するのは初めてとなりますが、2022年のタイのEV販売ランキングでは、11位となっています。

本田は2022年12月のタイ国際モーターエキスポにおいて、EV試作車「Honda SUV e:prototype」を発表し、2023年中に量産車の生産・販売開始を計画しています（写真2）。

トヨタ自動車もタイで2022年11月9日に同社初の量産EV「bZ4X」を発売しました（写真3）。同



写真3：タイ国際モーターエキスポに展示されていた「bZ4X」



日に予約受け付けを開始し、1日で3,356台の予約を受け付けましたが、予想を上回る勢いで予約が殺到したため、発売翌日に予約受け付けをいったん締め切りました。中国メーカーが販売している新車は不具合が相次ぎ、メーカー側の対応も含めて一部のユーザーから不満が出てきています。同モデルは、183万6,000バーツ（約734万円）と中国メーカーに比べると高価になりますが、これまで築き上げた「ブランド力」や「信頼感」から、価値を見いだしたユーザーから評価を得ていると思われます。

一方で、日系メーカーは内燃機関車の需要も継続すると考え、タイでのEV生産に完全に舵を切ったわけではありません。「bZ4X」の発売により、EVでも市場をリードする存在であることをアピールしたトヨタですが、カーボンニュートラル（CN）実現に向けて多様な選択肢があることを示しています。

2023年3月のバンコク国際モーターショーでは、水素を燃料とする燃料電池車（FCV）版スポーツ用多目的車（SUV）「カローラクロス」や液化石油ガス（LPG）を燃料とするハイブリット車（HV）のタクシーなど、様々なパワートレインを搭載した新エネルギー車を展示しました（写真4）。

急速なEV普及は電力需要の増加につながり、環境負担が低減されなければ、必ずしも環境にプラスとは言えません。タイがCNを実現するためにも、マーケットや環境に適した技術開発を行い、市場に訴求していく必要があります。

おわりに

タイでは、2023年第1四半期（1～3月）のバッテリー電気自動車（BEV）新規登録台数が1万4,625台となり、前年を大きく上回る勢いとなっています。タイの商業銀行大手カシコン銀行傘下のシンクタンク、カシコン・リサーチセンターの予測では、2023年のタイの新車販売台数を86万5,000台～89万5,000台とし、そのうちEVの販売台数を5万台としています。EVの販売台数が増加している背景としては、タイ政府によるEV振興策や勢いが増す中国系自動車メーカーによる新型モデルの投入、新規プレーヤーの参入などが挙げられます。



写真4：手前がFCV版「カローラクロス」、奥がLPGを燃料とするHVタクシー

EVの販売台数が伸びている一方で、インフラ不足が懸念材料となっています。今後のEV普及に欠かせない充電ステーションですが、タイ政府は2030年までに直流タイプ（DC型）のEV急速充電器を1万2,000基設置することを目標にしています（写真5）。タイ電気自動車協会（EVAT）によれば、2022年12月時点での充電ステーションの設置数は、DC型が1,342基、AC型が2,404基、合計3,746基となっています。充電ステーションの拡大も今後の大きな課題ですが、政府による支援策を利用し、インフラ設備の拡大が期待されます。

100年に一度の転換期といわれる自動車産業ですが、タイにおいてもその転換期を迎えています。時代の趨勢に取り残されないように、政府は各種政策を投じていますが、政府の後押しを受けた各自動車メーカーの今後の動向に注目が集まります。これまで、タイの自動車産業を牽引してきた日系自動車メーカーに、EV市場においても存在感を示せるように期待しています。



写真5：ショッピングモールに設置されている充電ステーション